

令和 4 年 9 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03012

研究課題名(和文) 英語重視と母語保持・外国語教育の拡大—シンガポールからの学び

研究課題名(英文) English emphasis, mother tongue maintenance and foreign language education:  
Learning from Singapore

研究代表者

郭 俊海 (GUO, Junhai)

九州大学・留学生センター・教授

研究者番号：20377203

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：シンガポールは、バイリンガル教育の政策を堅持し、英語を公式な場で使用される主要言語としつつも、母語教育を強化し中等・高等教育段階における多様な外国語教育を展開し、国民の言語的レパートリ(repertoire)の多様性を国の持続可能な発展に必要な不可欠なリソースとして位置づけている。近年、シンガポールの多言語教育政策は、多言語化、多文化化が進むに伴って必要性が高まりつつある多文化共生社会の構築の寄与に方向転換されてきている。異文化理解や多文化共生に多言語教育の促進が必要であることが、多言語・多文化共生を推し進めている日本にとって参考になる点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、歴史的な視点からシンガポールの言語政策の変遷を考察し、英語、母語、そして外国語の教育・学習の全体像を政策面、学習者の意識面及び学習者を取り巻く社会文化的側面から立体的にとらえたという視点にある。英語を公式な場で使用される主要言語とし、各民族の母語教育を強化しつつ、中等・高等教育段階における様々な外国語の教育を展開しているという多言語教育に向けたシンガポールの取り組みが、日本のみならず他のアジア諸国にとっても、母語、英語と英語以外の外国語教育のバランスがいかに保たれるべきかという課題への対応において、大いに参考になると思われる。

研究成果の概要(英文)：Singapore has made bilingual education a cornerstone of its national development and achieved national integration through various language policies. Meanwhile, while adhering to the policy of bilingual education and making English the working language, it has strengthened education in the mother tongues of each ethnic group, developed diverse foreign language education at the secondary and higher education levels, and positioned the multilingual repertoire of its citizens as an indispensable resource for sustainable development of the country. Singapore's recent language policy has been reoriented toward contributing to the creation of a multicultural society through multilingualism and multiculturalism. The need to promote multilingual education for cross-cultural understanding and multicultural conviviality can serve as a point of reference for foreign language education in Japan.

研究分野：言語教育学

キーワード：多言語教育 母語維持 外国語教育 英語教育 日本人大学生

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進むにつれ、英語がかつてない規模で人々の生活に浸透し、さまざまな次元で英語一辺倒の現象が起きている。シンガポールはアジアの英語教育の「先進国」として注目される一方、長年英語重視の結果、児童や生徒の中で英語と母語の使用における格差が生まれ、バイリンガル政策との乖離が深刻化している。この問題に対処するために、政府は初中等教育における母語と英語の教育のバランスをいかに保ち、中等・高等教育においていかなる外国語教育の政策をとって来たか、英語、母語、そして外国語の教育を視野に入れて、政策面から学習者のニーズに至るまでの、シンガポールの言語教育の全体像を研究することにした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、シンガポールのバイリンガル教育政策の歴史的変遷を考察し、英語重視と母語維持のバランスがいかに保たれているか、なぜ多様な外国語教育が必要か、そして国民に多様な外国語を学ばせる利点と目的は何かなどを明らかにし、日本やアジア諸国における英語教育や多言語教育への示唆を提示する、ことである。

## 3. 研究の方法

本研究では、研究の性質上、文献調査、量的調査及び質的調査の方法を用いた。

- ① 研究の初年（平成29年）度に、研究代表者は調査対象地であるシンガポールに渡航・滞在し、現地の研究協力者の協力のもと、シンガポールのバイリンガル教育政策に関する資料収集（書籍、論文、政府刊行物など）を行い、これまでの言語政策の歴史的変遷及び現状に対する分析・考察を行った。
- ② 次年度（平成30年）に、①の資料収集を継続しつつ、シンガポール人大学生を対象に、英語と母語の使用現状、日本語や他の外国語学習の動機づけ及び英語、母語、外国語に対する言語態度（言語観）に関する量的調査を実施し、その結果に対する分析・考察を行った。
- ③ 最終年度（平成31年）に、上記②の量的調査をシンガポール人中高生および大学生を対象に実施する予定だったが、コロナウィルス感染拡大による海外渡航が困難だったため、研究活動を急遽延期せざるをえなくなった。そして令和2年度に研究計画の一部を修正・変更し、日本人大学生を対象とした英語学習に対する意識と実態に関する量的調査および質的調査を実施し、日本人大学生の英語学習観の分析を行った。

#### 4. 研究の成果

- ① 研究の初年度に実施した資料調査の結果に対して整理・分析を行い、シンガポールのバイリンガル政策の歴史的変遷と近年の言語政策の方向性を明らかにした (Guo 2018)。具体的には下記3点にまとめられる。
  - ・ シンガポールは建国後、バイリンガル教育政策を国づくりの礎に据えながら、人口の7割以上を占める華人系国民の間で使用されてきた方言から中国語 (マンダリン) へ切り替える「華語を話そう (Speak Mandarin Campaign)」といった言語政策を通じて、国民統合を図った。その意味で、言語政策は国民統合・国民アイデンティティの形成を実現するための有力な手段だったと言える。
  - ・ 一方、80年代以降もバイリンガル教育の政策を堅持しつつ、中等教育から大学教育まで外国語教育の導入と拡大の方針がとられ、国民の言語レパートリー (Repertoire) の多様性を国の持続可能な発展に必要な不可欠なリソースとして位置づけられてきた。
  - ・ 外国語教育の目的は80年代まで外資及び多国籍企業の誘致に伴う外国人材の育成だったが、それが近年、多言語化、多文化化が進むに伴って必要性が高まりつつある多文化共生社会の構築・強化、国民のグローバル市民 (Global citizenship) の育成への寄与に方向転換されている。
- ② 研究の次年度に、シンガポール人大学生 (104名) を対象とした日本語学習の動機づけと言語意識に関する質問紙調査を実施し、その結果について学会で報告を行った (郭・陳 2019 ; 郭 2020)。

成果として、シンガポール人大学生が日本語を外国語として学ぶ動機づけとして、大きく「交流志向」、「自己尊重」、「若者文化」、「仕事」、「異文化理解」、「新しい世界観の形成」という6つの要因が抽出された。先行研究 (郭・大北 2001)、(郭・タン 2012) の結果を支持しつつも、先行研究になかった「異文化理解」、「新しい世界観の形成」という新たな動機づけが確認された。これは、グローバル化が進むに伴う高度の外国人材の積極的受入を強化し、金融、ビジネス、教育、情報などさまざまな分野における地域的ハブとしての地位確立を目指そうとしている政府の政策を反映し、言語をただコミュニケーション

ョンの道具としてではなく、国民の多文化理解やグローバル市民の育成に必要な不可欠な要素であるとしていることが示唆されている。さらに、中等教育における多様な ASEAN 周辺国の言語の教育強化や高等教育における多様な外国語教育の拡大の現状を明らかにし、日本における外国語教育への示唆を示した（郭 2021）。具体的に以下のとおりである。

- ・ 生徒の多言語への気付きや多言語多文化への理解を促進するために外国語教育の早期導入が必要であること。
- ・ 高等教育における多様な外国語教育の導入、学習時間数の増加、特に「話す」「書く」といった言語運用力に重きをおいた教育改革が必要であること。
- ・ 社会教育における多言語教育の促進が必要であること。

③ 最終年度に日本人大学生の言語観や英語学習に対する態度、信念に関する意識調査（質問紙調査と半構造化インタビュー調査）を実施し、その結果について学会等で報告した（郭 2021; 郭 2022）。

- ・ 英語学習における日本人大学生が抱く英語母語話者像が、Kachru（1985）が指摘した英語を母語とするアメリカ人、イギリス人（特に白人系）といった「内円（Inner circle）」の国々の英語話者（従来「ネイティブ信仰」とされている）から、シンガポールやマレーシアなど「外円（Outer circle）」の国々の英語話者へ変わりつつあり、日本人大学生の英語学習観に変化が起きていることが確認された。
- ・ インタビュー調査では、英語学習におけるネイティブ信仰があったものの、交換留学、海外滞在及び留学生との交流といった実際に英語による交流活動が、かれらを英語学習における不安やネイティブ信仰から解放する重要なファクターであることと、またこれらの活動を通じて、世界でさまざまな英語が話されていることを知ることによって、英語学習とその使用に自信を持てるようになった重要なきっかけになっていることが浮き彫りになった。
- ・ 上記の結果を踏まえ、中等・高等教育において「話す」「書く」といった運用力育成を強化したカリキュラムを改善するとともに、海外留学、多様な留学生との交流活動を促進し、生徒や学生たちが実際に英語を用いたコミュニケーション活動に参加できる機会を早期且つ最大限に提供することが、日本における英語教育の重要かつ喫緊の課題であることが示唆された。

## 主な参考文献

1. Guo, J. H. 2018. The bilingual education and foreign language policy in Singapore. Conference paper presented at LPP Conference 2018 at OISE/University of Toronto “Multidisciplinary Approaches to Language Policy and Planning”.
2. Guo, J. H. 2021. Teaching and learning English in Japan: with a focus on nativeness in learning English by Japanese university students. CLS 20th Anniversary e-Symposium, National University of Singapore, 2021.12.
3. Kachru, B.B. 1985. Standard, codification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle, in R. Quirk and H. Widdowson (eds.) *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 11–30.
4. 郭俊海. 2020. 「シンガポールの言語政策と日本語教育」 オンライン国際研究集会/Colloque International 2020 「ひとつの言語教育から複数の言語教育へ：CEFRからみた日本語、英語、外国語教育の連携と協働」 (2020. 11) .
5. 郭俊海. 2021. 「シンガポールの言語政策と多言語教育の実態—日本の外国語教育への示唆—」 野世英水・加藤斗規編『近代東アジアと日本文化』銀河書籍.
6. 郭俊海. 2022. 「英語学習における日本人大学生のネイティブ信仰について」 第5回日本語・日本文化国際学術大会 (オンライン、2022. 03) .
7. 郭俊海・大北葉子. 2001. 「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」 『日本語教育』110号、130-139、日本語教育学会.
8. 郭俊海・タンチンイェン. 2012. 「シンガポールの中等教育における日本語教育：日本語学習者の動機づけを中心に」 『九州大学留学生センター紀要』20号、35-46.
9. 郭俊海・陳連冬. 2019. 「シンガポールの言語政策と日本語教育」 第4回日本語・日本文化国際学術大会 (韓国、建国大学、2019. 11. 8-10).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 郭 俊海
2. 発表標題 英語学習における日本人大学生のネイティブ信仰について
3. 学会等名 第5回 日本語・日本文化国際学術大会（オンライン）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 GUO Junhai
2. 発表標題 Teaching and Learning English in Japan: with a focus on nativeness in learning English by Japanese university students
3. 学会等名 CLS20th Anniversary e-Symposium "The past connects, the present reflects, the future perfects", National University of Singapore（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郭 俊海
2. 発表標題 「シンガポールの言語政策と日本語教育」
3. 学会等名 国際研究会（Colloque international 2020）「ひとつの言語教育から複数の言語教育へ：CEFRからみた日本語、英語、外国語教育の連携と協働」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 郭俊海・陳連冬
2. 発表標題 シンガポールの言語政策と日本語教育－日本の外国語教育への示唆－
3. 学会等名 第四回日本語・日本文化国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 GUO Junhai
2. 発表標題 The Bilingual Education and Foreign Language Policy in Singapore
3. 学会等名 Multidisciplinary Approaches to Language Policy and Planning, OISE, Toronto (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 郭 俊海	4. 発行年 2021年
2. 出版社 銀河書籍	5. 総ページ数 610 (pp.468-487)
3. 書名 「シンガポールの言語政策と多言語教育の実態－日本の外国語教育への示唆－」『近代東アジアと日本文化』野世英水・加藤斗規編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------